

【補論】

## 朝鮮東九陵の視察報告と兆域の選定に関する所見

来 村 多加史

### Report on a Research Trip to the Donggu-Reung Tombs and Observations Regarding the Location of the Burial Site

KITAMURA Takashi

キーワード：朝鮮王陵 (Joseon Royal Tombs), 東九陵 (Donggu-Reung Tombs), 健元陵 (Geonwolleung tomb), 兆域 (Location of the Burial Site), 風水思想 (Fengshui thought)

2010年7月3日に篠原啓方氏の案内でソウル特別市郊外の朝鮮王陵を訪れ、李氏朝鮮初代国王太祖李成桂の健元陵を初建陵とする「東九陵」と中宗文定王后尹氏泰陵の陵前に開設された朝鮮王陵展示館を視察した<sup>1)</sup>。時間の都合により、陵墓の現状を確認できたのは、東九陵のうちの5陵と附葬された数基の後陵だけであったが、篠原氏の計らいにより、一般には立ち入りが制限されている封墳の周りを歩き、陵の選地と陵背からの景観をつぶさに観察できたことは幸運であった。本稿ではその成果報告とあわせ、朝鮮王陵の選地についての所見を述べる。

#### 朝鮮王陵の分布

2009年に世界文化遺産に登録された朝鮮王陵ならびに王后陵は40箇所であり、登録を見合わされた朝鮮民主主義人民共和国（以下「北朝鮮」と略す）内の2箇所をあわせて42箇所がソウル特別市を中心に分布している。もっとも、これらは登録上の便宜的な数値であり、王陵と同原異封で合葬された王后陵は数えられず、王陵とは別に葬られた妃嬪や王族の墓もその数には含まれない<sup>2)</sup>。封墳の数で言えば、全

---

1) 2010年7月2日にソウルの高麗大学校で開催された関西大学文化交渉学教育研究拠点 (ICIS) と高麗大学校韓国史研究所主催のシンポジウム「陵墓からみた東アジア諸国の位相——朝鮮王陵とその周縁——」にコメンテーターとして招かれ、その翌日に東九陵と朝鮮王陵展示館への視察に同行した際の踏査成果を基にした報告である。ICISの支援による成果であることを明記し、謝意を表します。

2) 朝鮮王陵の地形についての論述は村山智順の『朝鮮の風水』(朝鮮総督府編, 1931年)に見られる。朝鮮における村山の精力的な調査研究は多岐におよぶが、李朝の王陵に対しては、東九陵、第26代高宗(大韓帝国初代皇帝)の洪

体数は3倍以上に達するが、とりあえず、世界遺産の資産として数えられた王陵と王后陵、廢帝となった燕山君・光海君の2墓、北朝鮮の2陵をあわせた44箇所を地図に記した<sup>3)</sup>。図1はソウル特別市内ならびに近郊の王陵分布図、図2はソウルから離れた遠隔地の王陵分布図である。まずは両者をあわせ見て、全体を把握していただきたい。

大半の陵は宮都である景福宮に近すぎず、遠すぎない場所に造営されている。文末に掲げた一覧表には景福宮中心建築の勤政殿を起点として計測した直線距離を示した。それらの数値を見ると、44箇所のうち、半径10km圏内に入るものは8箇所、10km～20km圏内にあるものは19箇所、20km～30km圏内にあるものは9箇所、30kmよりも遠方にあるものは8箇所と、10km～20km圏内に分布が集中している。分布図を見ても、ソウル特別市の周縁部に集中していることがわかる。景福宮から5km以内にあるものは太祖神徳王後の貞陵だけであり<sup>4)</sup>、都から近すぎる位置を避けたことが明瞭である。追放先で非業の死を遂げた第6代王端宗の莊陵が137kmと、大きく距離を隔てているが、それを例外として省き、あとの43箇所の平均距離を求めると、20.22kmという数値が出た。徒歩で拜陵しても、1日のうちに往復することが十分に可能な距離である。

---

陵と第27代純宗の裕陵を実地調査し、風水理論から求めて所見を述べている。章中に掲載された李王家陵墓の一覧表には王陵・后陵・妃嬪墓131箇所が列せられ、網羅的である。朝鮮王陵の調査報告を行うには、本来これらすべての陵墓を遍く踏査しなければならない。

- 3) 本稿に掲載した諸陵の分布図ならびに地形図は図4を除いて、いずれもGoogle Mapをもとに作成した。図中の地名はwebsiteの「韓国地図コネスト (<http://map.konest.com/>)」に従った。北朝鮮の地理情報はGoogle Mapに掲載されていないが、Wikimapiaにある程度の情報が入力され、開城市の齊陵と厚陵、咸興市の度祖義陵については位置が表示されていて、検索にかかる。遺跡の分布図や周辺地形図はこのようなweb情報によって作成することが可能であるが、Google Mapでは河川や道路などのlayerと等高線のlayerにズレがあるため、補正が必要である。わが国と同様に、韓国でも国土地理情報院により全土の5000分の1地形図が作製されていると聞けが、いまだ軍事上の問題があって門外不出であり、日本国内で入手可能なのは5万分の1地形図(『大韓民国1:50000最新地図大辞典』セハン地図、2007年8月)に限界である。ただし、陵墓の地形を観察する場合には、5万分の1程度の精度では話にならない。都市開発による地形の破壊が進む前に、1万分の1以上の詳図を併用した調査記録を残しておく必要がある。とくに韓国国内の研究者に早期の記録と公開をお願いしたい。
- 4) 貞陵にしても、初葬の位置から現在地に遠ざけられた経緯がある。王に先んじた神徳王后は太祖6年(1397)1月3日に京内の聚賢坊北原に葬られたが(『太祖実録』)、太祖没後の太宗9年(1409)2月23日に現陵のある「沙乙閑」麓に遷葬された。継母を憎む太宗の処断であるというのが通説であるが、理由はそれだけではない。聚賢坊の北原は景福宮に近い一等地であり、そこに広大な兆域を占めては都市開発の妨げになる。太宗6年(1406)4月7日には、太祖存命中であるにもかかわらず、議政府から「貞陵が京中であって兆域が広いため、陵より百歩以外を宅地として宜しいか」という上奏文が出されて制可された。そののち達官たちは先を争って宅地を開き、貞陵の兆域が蝕まれていった。太祖没後の1409年に遷葬される際、議政府は「古の帝王の陵墳は皆都城の外に在り。今、貞陵は城内に在りて便ならず。且つ使臣の館に近し。乞ふらくは外に遷されんことを」という意見を出した。陵墓を宮都の近くに営めば、都市開発上の弊害が生じる、という実際的な問題が陵墓を遠ざける理由であったことがわかる。議政府の上奏文という「古の帝王」の旧例とは、『文献通考』を典範のひとつとした李朝の場合、高麗王朝の旧制もさることながら、開封に都して125kmの距離を隔てた鞏県に陵区を設けた北宋王朝の例や、臨安に都して62kmの距離を隔てた富盛県に攢宮(假葬地)を設けた南宋王朝の例を前提としているのであろう。そのような中国の例に比べると、都から平均20km前後の距離に陵墓を営んだ李朝は、むしろ近接地に陵墓を構えた王朝であったと言える。中国と朝鮮で為政者による拜陵の頻度が大きく異なることも距離の取り方の違いに現れているものと予想している。

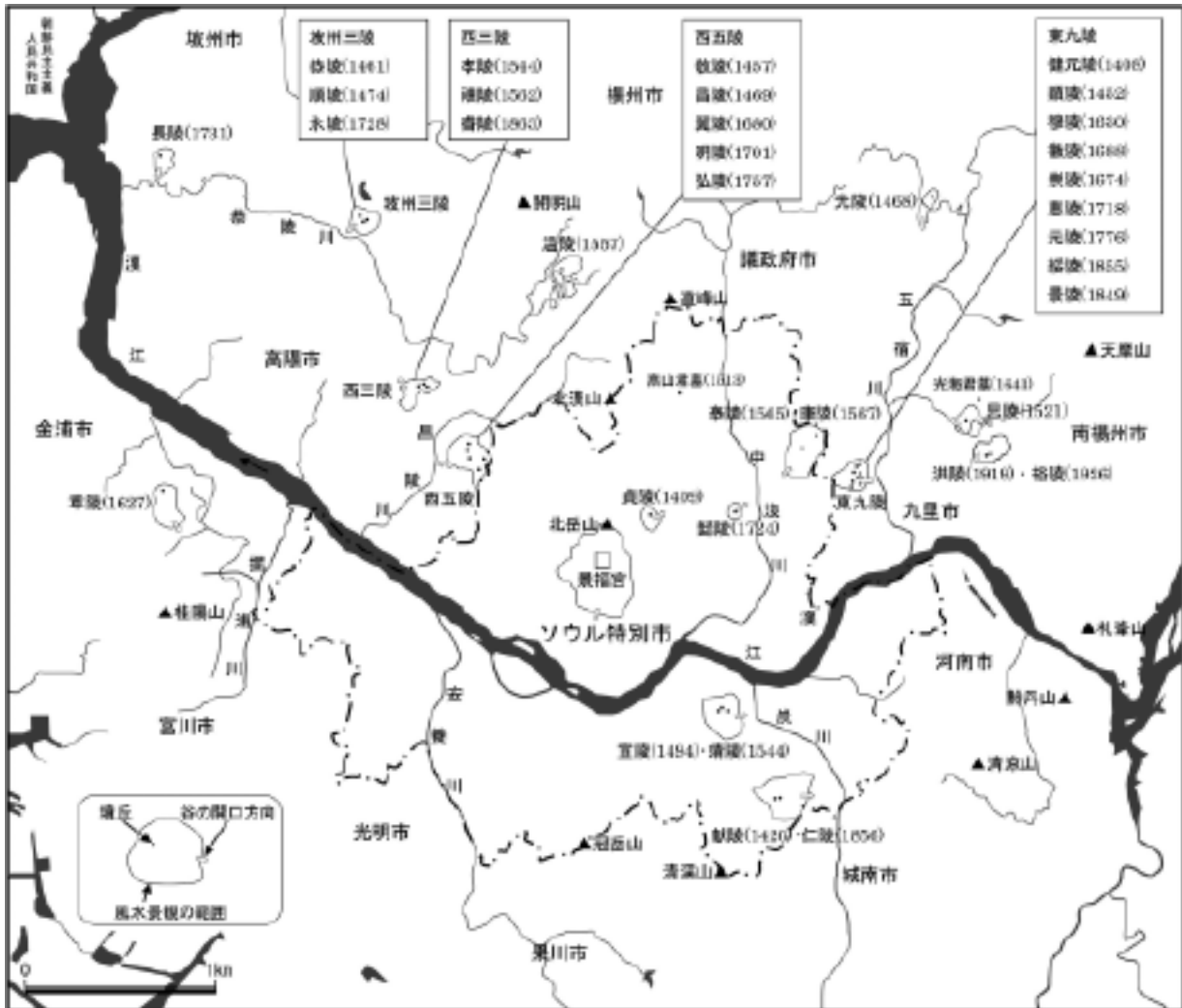


図1 ソウル特別市近郊の朝鮮王陵

李朝王陵の兆域は結果として数代の陵を造営できる広い谷が選ばれている。著書『朝鮮の風水』の中で太祖健元陵を初建とする東九陵のあり方を論じた村山智順は、太祖が高麗王朝の独立王陵の制をよしとせず、族陵の制度を採用した結果であるとした<sup>5)</sup>。村山説の可否は別として、陵墓の地形を論じるには、谷を含む広い範囲に目を及ぼして地形を語る必要があるだろう。したがって、図1では単に陵墓の位置を示すだけでなく、谷の範囲を図化し、谷の開口方向を矢印で示した。その外郭線は谷を形成する尾根筋のラインをもって引いた。したがって、築造当時に定められた陵域とも、現在の史跡の指定範囲とも、ぴたりと重なるものでないが、景観をもって王陵の選地を説こうとすれば、谷中に築かれた陵墓から見渡

5) 前掲『朝鮮の風水』第2編第2章第8節は李朝の王陵に関する村山の報告と所見であるが、その節の東九陵の条に「この陵は李朝王陵中族陵の代表的なもので太祖の健元陵外八陵と同一山所に営んだものである。伝ふる所に依れば、太祖は高麗時代独立王陵の制が各種の弊害あるに鑑み、族墓の式を採用すべく有名なる風水僧無学にその適地を占定めしめ漸くにして得たるものが此の地であり、その山谷の形相恰も日月の抱合せるが如き稀有の大地であるとの事である。」とあって、高麗の「独立王陵」制に対する李朝の「族陵」制が太祖の意志より生じたものと説いている。この説によれば、東九陵の谷はもとより数代の王陵を営むことを見据えて選ばれたことになるだろう。

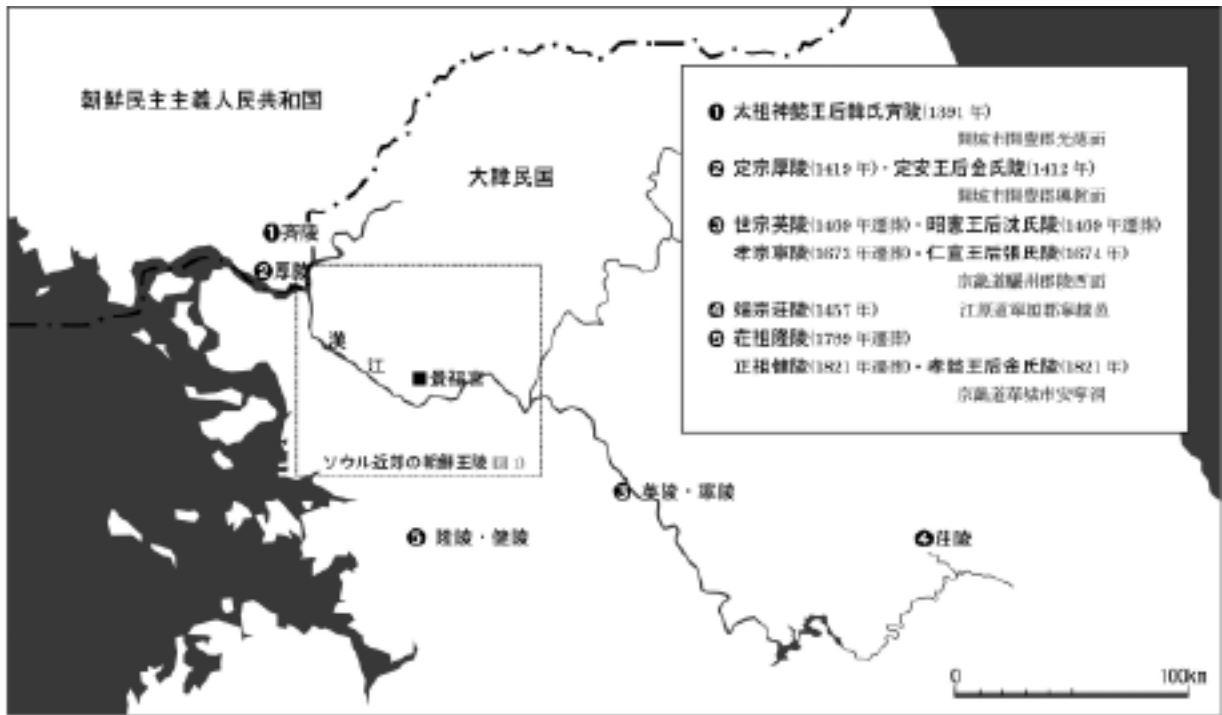


図2 遠隔地の朝鮮王陵

した際の景観領域に意味を持たせるのが合理的である。その場合に意味を持つ範囲が図示した外郭線である。図1に示した諸陵の枠取りはそのような視覚的な範囲であるをご理解いただきたい。

ここで分布を確認しておく。まずは図2に示した遠隔地の諸陵を見ていただきたい。建国当初の祖陵などが都から離れることはよくあるが<sup>6)</sup>、王朝なかばの王陵が都から遠く離されるのは、それぞれに特別な理由がある。遠隔地であることに歴史的な背景があるため、事情を探らねばならない。主に各朝の実録に依りながら簡単に事情を記す。

北朝鮮の開城市開豊郡には太祖神懿王后韓氏の齊陵と第2代定宗李芳果の厚陵がある。太祖の第1夫人である韓氏は高麗末期の辛未の年（1391）9月23日に享年55歳で病没し、開城の南、海豊郡治栗村の原に葬られた。その位置は高麗王宮の満月台から10kmであり、都の近接地である。太宗4年（1404）に建てられた陵碑の全文が『太宗実録』に収録されている。墓はその際に王后の礼をもって改修されたものと思われるが、原位置から遷されたという記述はない。齊陵の南7.2kmにある厚陵は定宗と定安王后金氏の「同原異封」合葬陵である。弟の太宗に擁立された定宗はわずか2年にして王位を譲り、世宗元

6) 李氏朝鮮の祖陵は北朝鮮の咸鏡南道に分布する。太祖元年（1392）8月8日に宮殿の東北面に祖四代の陵室を祭り、陵號を決定した。つまり皇考の桓祖大王の定陵と皇妣の和陵、皇祖の度祖大王の義陵と皇祖妣の純陵、皇曾祖の翼祖大王の智陵と皇曾祖妣の淑陵、皇高祖の穆祖大王の徳陵、皇高祖妣の安陵である。同年10月28日に諸陵山勢の画本が献上された。太祖実録のその条に「定陵・和陵・義陵・純陵、皆在咸州、智陵在安辺、淑陵在文州、徳陵、安陵在孔州。毎陵置陵直樞務二人、守陵幾戸、營立齋宮」とある。このうち徳陵と安陵、義陵、定陵と和陵の5陵はWikimapiaで検索が可能である。徳陵と安陵、定陵と和陵はそれぞれ同原合葬であり、北朝鮮咸鏡南道咸興市東郊外の丘陵地帯にあり、義陵は咸興市興南区域長興里の丘陵にある。衛星写真で見える限り義陵は単独の楕円形墳である。当地には軍の基地も多数存在するため、訪れることはできそうにない。

年（1419）9月26日に63歳で病没した。退位後は安定した生活を送り、陵地も本人の遺命に従い、世宗2年1月3日（1419年10月15日）に、先だった金氏の墓に合葬された。金氏は太宗12年（1412）に没し、8月8日に海豊郡の白馬山東麓に葬られた。現陵の位置であり、風光明媚な土地である。その立地は図7に示した。漢江に向けて開口する長い谷の奥にある。

景福宮から60kmあまりを隔てた京畿道驪州陵西面にある第4代世宗の英陵は同所にある第17代孝宗の寧陵とあわせて英寧陵と通称されている。1450年に世を去った世宗の陵は父帝である太宗の献陵兆域の内（図8）に葬られたが、第7代世祖の時代に立地が宜しくないとの議論が起こり、世祖は衆議を退けたものの、第8代睿宗の元年（1469）に再び同様の議論が持ち上がって、ついに現在地に遷されてしまった。遷葬の背景は政争ではなく、術官の意見によるものである。詳しい経緯は村山智順が述べているので、註に記す<sup>7)</sup>。

これらに対し、端宗の莊陵が都から遙か東方に離れた場所に営まれたのは、明らかに政争の結果である。1452年、父文宗の死をうけて11歳で即位した端宗は叔父の首陽大君（世祖）によって王位を奪われ、現陵のある江原道寧越に追放されたのち、1457年に毒を賜って16年の生涯を閉じた。魯山君の名で葬られた端宗は240年あまりも過ぎた第19代肅宗の24年（1698）11月6日に復権し、墓は莊陵と名づけられた。妃の宋氏も同時に定順王后と追諡され、京畿道楊州市真乾面の墓は思陵と号された。そのとき王陵・后陵としての体裁をなしたようだが<sup>8)</sup>、葬地は元のままで、都の近辺に帰されることはなかった。

景福宮の南方40kmにある莊祖隆陵と正祖健陵は世界遺産に登録された水原華城の南8kmにある花山に並ぶ。莊祖は老論派の讒言を受けた父帝英祖によって米櫃に閉じ込められ28歳で餓死した莊献世子である。その亡骸は楊州拜峰山の永佑園に葬られたが、遺児の正祖は即位すると、正祖13年（1789）10月7日に錦城尉朴明源の意見に従い莊祖の梓宮を永佑園から花山の顯隆園に遷した。正祖24年（1800）6月28日に没した正祖は11月6日になって顯隆園の東第二岡（龍珠寺の近辺）に葬られ、健陵と号された

7) 『朝鮮の風水』第2編第3章第3節「風水に依る墓の移改3英陵の改遷」の文章を以下に転載する。

李朝四代の王世宗の陵はその初め広州の献陵（太宗の陵）局内に造営されたものであった。然るに七代世祖の朝、英陵が吉地でないから他に吉地を選んで遷葬しなければならぬと云ふ論議が出た。そこで世祖は時の学者徐居正を召して下問すると居正対へて曰く、『山水方位を以て子孫の禍福と為す、臣未だ知らざるなり。且つ世の葬を遷すは獲福を求むるなり。王者は更に何の望むところあらんや。』上曰く『吾復た遷陵に意なきなりと。』云ふ訳で世祖の時はこの遷陵は中止されてしまった（増補文献備考）。処が八代睿宗の元年（一四六九）に再び英陵を他に改遷すべしと云ふ議が持上った。それは日官が『英陵坐局所直之宿。有不応古経者。宜改建玄宮。以膺丕休。』と上言した事からである。この上言あるや睿宗は早速之を群臣に下して論議せしめた。而してその結果は次の如くである。『皆曰。改葬古矣。葬故有闕則尚且改葬。況今風水之司有言。必有所稽。不可不従。』そこで睿宗は宰相を各地に分遣して改葬するに適する吉地を探求させた。『郡臣啓曰。驪興（驪州）之北。有一大洞。丘巒列勢。主对粲然。法曰山頓水曲子孫千億。以臣等所相、陵寝所安、無右於此。』この上説が採納されて、この年直に世宗の梓宮は驪州に遷されたのである。（金守温、「報恩寺記」）

8) 陵としての体裁が整えられたことは『肅宗実録』24年11月29日の条に封陵都提調の崔錫鼎が奉じた「思陵陵内の鄭家諸塚は已に累百年を過ぎたり。貞陵内の旧塚の掘移せざるの例に依りて特に仍存するを許さんことを。恐るらくは妨することなからん」という上奏文によってわかる。肅宗は大臣に問うて崔錫鼎の意見を許し、さらに「聞するに莊陵の内に六臣の祠宇有りという。並びに仍存せしめ移すことなかれ」と指示した。二墓の兆域を拡大して陵域の確保が図られなければ、このような問題も生じることはない。

が、純祖21年（1821）3月9日に没した大妃孝懿王後の葬所を定める際に風水の問題が論じられ、同年9月13日に顕隆園右岡の現在地に遷され、同原異封合葬されることになった。なお莊獻世子の廟号が莊祖と定められたのは高宗時代の1899年12月9日の議政府建議によるものである。

以上のように、遠隔地に兆域が定められた諸陵にはそれぞれの事情があるが、世宗英陵の遷葬に代表される風水論議はソウル近郊の陵墓でも繰り返された。むしろ風水を考慮せずに選定された兆域はなく、その選定をめぐる複数の術官や官僚が意見を戦わせることが常態である以上、ひとたび選ばれた兆域の吉凶をめぐる、のちに議論が再燃することは当然の成り行きであった。そのようななか、太祖健元陵については、土地の吉凶が選定後に論議されることがなかった。その地は開国の功臣河崙が相地に長けた劉旱雨・李陽達・李良を連れて見つけ出した風水の宝地であり<sup>9)</sup>、朝鮮王陵の中で最多の王陵を蔵する兆域になった。いわゆる東九陵である。それでは本題である東九陵の視察報告に移ろう。

### 東九陵の視察報告

2010年7月3日に篠原啓方氏の案内で東九陵のうちの綏陵・顕陵・健元陵・穆陵・元陵の5陵を視察することができた。その日は天候にも恵まれ、足元を気にすることなく拝陵できたのは幸いであった。東九陵は図3に示したように、北から南流し漢江に水を灌ぐ玉宿川に面した谷にある。玉宿川の沿岸は都市開発が進み、ソウルのベッドタウンである九里市の高層住宅が外郭循環高速道路の九里ICの回りまで押し寄せている。行政区で言えば仁昌洞が九里市街地の北限となり、東九陵はまさにその位置にある。谷の先に九里ICがトグロを巻き、インターチェンジに取りつく道路網と宅地が開口部に迫っている。ソウル市内からの交通は便利であるが、兆域前方の景観は往時の田園風景が高層住宅街に一変している。

東九陵の駐車場は乗用車60台、大型バス8台ばかりが駐車できる広さであり、入場料は1000ウォン、日本円にして100円未満と安価である。券売所は谷の入り口にあり、一般の参拝者は左手に溪流を見ながら広い参道を進むのだが、我々は篠原氏の先導で参道脇の管理事務所に向かった。そこで篠原氏が公認ガイドの証となる緑色のジャケットを借りた。ジャケットを羽織った篠原氏は管理所が認める案内人となり、その引率によって陵の近くまで登ることが許されるという規則であるようだ。そのような案内人のつかない一般の参拝者は陵下の丁字閣から陵原を瞻仰するにとどまり、それでは封土や陵前の石造物

9) 太祖健元陵の選地については、村山智順が風水の大家無学大師によるものとするが（脚注5）、事實はやや異なる。『太宗実録』には太宗8年（1408）6月28日「山陵を楊州儉巖に定む。初め、領議政府事河崙等復た劉旱雨・李陽達・李良等を率い、地を楊州に相る。檢校参贊議政府事金仁貴、崙等を見て之に告げて曰はく、我が居る所の儉巖に吉地有りと。崙等を相るに果して善なり。造墓都監提調朴子青工匠を率いて始めて役す」とあり（『太宗実録』）、健元陵の地は金仁貴がたまたま出会った河崙等の探索使に自己の私有地を推薦したものであった。それは太祖没後10日後の出来事であり、太祖の遺詔ではありえない。ただ、東九陵の地は誰しものが認める風水の宝地であったことは、健元陵完成後に当地を訪れた明朝の使臣祁保の驚きによってわかる。『太宗実録』8年（1408）10月6日に「祁保等檜巖寺より、健元陵を歴観して還る。世子出でて東郊に迎ゆ。保等陵寢の山勢を見て、歎じて曰く、安くんぞ此の如き天作の區有らんや。必ず是れ山を造るなり」とある。つまり、陵域の山勢があまりにも見事なので、祁保は人工地形ではないかと疑ったのである。明の永樂帝が寿陵の地を探索させるのはその翌年であり、結果として昌平の天寿山下を選定した。二つの出来事に関連性があるかどうかは、研究課題とする。

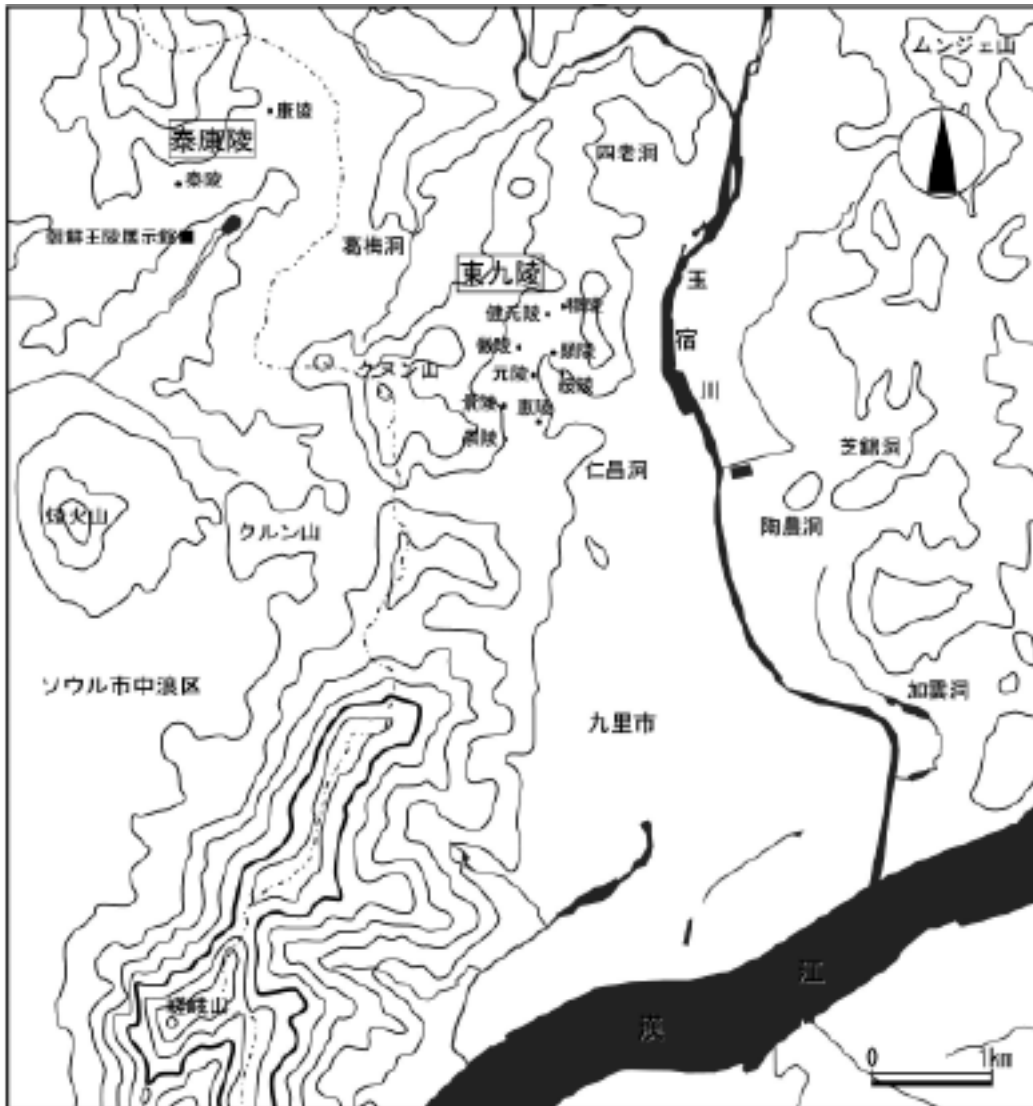


図3 東九陵と泰康陵の位置

を間近に見ることができない。とはいえ、「墓は参るもので、見るものではない」という姿勢に韓国の良識を感じる。管理事務所から谷の奥に向かって森を少し歩けば、右手に芝生の明るい広場が現れる。翼宗（文祖）李昊と神貞王后趙氏を同墳合葬した綏陵である。

翼宗は憲宗の父である孝明世子の追諡廟号で、純祖の世に王世子として聴政に当たったが、純祖9年（1850）5月6日に病死し、同年8月4日に楊州天蔵山下に葬られた。その墓は延慶墓と名づけられ、憲宗の即位後に綏陵と改号された。1855年1月18日に純祖の仁陵の山勢が宜しくないとの意見が出され、そのとき綏陵の山勢も論議され、結局は同年8月26日に翼宗の梓宮は延慶墓から現在地の東九陵に遷されるに至った。綏陵は東九陵のうち最後に築かれた陵であるがために、選択できる土地が制限されたのだろう、右側が山に寄ってせり上がり、左側は溪流に向かって傾く不安定な兆域となってしまった。とはいえ、現在は周囲に樹木が生い茂り、地形をうまく森の中に隠している。

谷中の溪流は石垣の護岸壁が施されている。川筋をまっすぐに伸ばすことなく、故意に蛇行させている。

そのような造作是北京郊外の明清皇帝陵にも見られる。蛇行した溪流を左手に見ながら進むと、綏陵からさほど歩まないうちに、顕陵の丁字閣が右手奥に見えてくる。文宗と賢徳王後の異原合葬陵である。

第5代王文宗李珣は父世宗の死去（1450年2月）を受けて即位したが、2年後の文宗2年（1452）5月14日に享年39歳にして病没した。亡骸は同年9月1日に健元陵東南の顕陵に葬られた。選地に議論が起こらなかったことから、生前より決定していたのかも知れない。顕陵の東120mには顕陵造営から60年あまり後に築かれた顕徳王后権氏の封墳がある。顕徳王后は文宗に先立つこと11年前の世宗23年（1441）7月24日に病没し、京畿道安山郡の昭陵に葬られたが、文宗の埋葬時には同墳合葬されず、中宗8年（1513）4月21日になって、はじめて東九陵へ改葬された。魯山君に落とされ僻地で毒死した端宗の母であるため、一時は宗廟からも排除されたが、中宗時代に復権して、あるべき場所に梓宮が遷された。

顕陵の封墳は背後の丘から突き出た尾根の上に造営され、顕徳王后陵は同じ丘から派生する小さな尾根の上にある。その東には翼宗綏陵の背後まで長く尾根が伸び出ているため、封墳の尾根は異なっても、同じ兆域に寄り添う印象を受ける。『中宗実録』の史臣挿話に文宗陵と王后陵の中間にあった松樹が立ち枯れて、互いに見通せるようになったことを人々が精霊の所業であると噂したことが記される<sup>10)</sup>。王陵と后陵が醸す景観に一体感を求める観念が定着していればこそその逸話であり、そのような一体感は顕陵の北に兆域を構える宣祖穆陵において、さらに顕著である。

顕陵から谷筋に沿って北上すれば、その突き当りに東九陵の初建陵である太祖健元陵がある。王子たちの皇位継承争いを嫌い、李氏朝鮮発祥の地である咸興（北朝鮮咸鏡南道咸興市）に引きこもった太祖李成桂は、第3代国王太宗李芳遠の説得に応じて漢城へ帰京し、太宗8年（1408）年6月18日に74歳で没した。『太宗実録』には葬地を揚州の儉巖山とする。儉巖山は健元陵の西南西1.4kmに海拔141mの山頂をもつクヌン山であり、漢城市と九里市の境界に位置する（図3）。

クヌン山から健元陵へ続く尾根筋は陵の北でへの字に折れて南東方向へ伸びる。一方、クヌン山の南東方向へ派生した尾根筋は崇陵の南でVの字に折れて北東へ伸びる。クヌン山を起点として南北へ伸びる二筋の尾根が再び東方で接近し、全体としてC字形の谷を形成している。まさしく東九陵は肅宗の明陵図（図9）にも示される、谷を抱える理想的な山丘の地形を完璧に具えているのである。袋状の谷は内部において枝状に分かれ、健元陵はそのうち最も太く最も長い谷筋の突き当たりに築かれた。初建陵だけあって、谷中で最高の位置を占めたことは当然である。主軸となる谷筋は入り口から北東に切れ込んだあと、右へ屈折し、健元陵の陵前でほぼ南北方向に軸をとる。北の高所に坐して南を見下ろす景福宮の景観が陵前の地形に投影されているかのようである。複数の陵が谷の景観を共有する例は、太宗献陵と純祖仁陵の献仁陵（図8）、徳宗敬陵・睿宗昌陵・肅宗仁敬王后金氏翼陵・肅宗明陵・英祖貞聖王后徐氏弘陵を含む西五陵（図10）、睿宗章順王后韓氏恭陵・成宗恭恵王后韓氏順陵・真宗永陵を含む坡州三陵（図11）、仁宗孝陵・中宗章敬王后尹氏禧陵・哲宗睿陵と多くの皇族・妃嬪墓を含む西三陵（図12）などがあり、いずれも初建陵が谷筋を南に見下ろす北寄りの斜面に築かれているのは偶然ではなからう。

健元陵の丁字閣から奥へ進み、木柵で仕切られた禁足区に入ることができた我々は陵前で参拝したあ

10) 『中宗実録』中宗8年（1513）4月21日の記事「顕徳王后梓宮下玄宮」に付された史臣の言に「日新顕陵、在旧顕陵之東、相距不遠、両間松木一條、無端立枯。工人斫之、則正開其蔽、両陵更無遮隔。人皆以為精霊所感也。」とある。



と、封墳を襟のように取り囲む曲垣の背後に回った。かつては朝鮮王ですら立ち入ることのなかったエリアであるだけに、身が縮む思いであったが、封墳に拝礼したあと、その場の地形と前方の景観をしっかりと観察した。下から見て予想した通り、封墳は尾根の稜線を削った平坦面に築かれ、曲垣の後ろには削られる前の尾根筋が残されている。さすがに後方の松林へ分け入ることは憚られたため、その場からの観察にとどまったが、尾根筋は緩やかに高度を増しながら、さらに後方へと続いてゆくようである。そのような推測は図4に示した東九陵の地形図において確認することができた。

地形図は英祖元陵の陵前に建てられた諸陵の案内図をトレースしたものである。等高線の一部に若干の違和感があるものの、全体として地形をよく捉えた図面である。樹冠を撮影して樹高で補正する航空測量では、ここまで複雑な地形の起伏は表現できない。東九陵は森に包まれているため、なおさらである。おそらくは平板測量によるものであろう。こういう地形図が世界遺産に登録されたすべての陵で作成されたのだろうか。もし存在するのであれば、公開が望まれる。

地形図を見ると、北方から健元陵の封墳に向かって一筋の際立った小尾根が伸びている様が等高線に現れている。陵前に左右から尾根が迫り、主軸となる谷の奥に小さな袋状の谷が形成されている様もわかる。その谷は封墳のある尾根によって左右に分かれ、全体の平面形状がハート形を呈している。そのうち健元陵から見て左手の谷に宣祖穆陵の兆域が設定されているのだが、穆陵と健元陵の間にひと筋の細い尾根が突き出ていることも見落としてはならない。この尾根があるために、二つの陵が景観の上で分離している。思うに穆陵は健元陵からの眺めを阻害しないような場所を故意に選んだのかも知れない。そう思って見ると、さきほどの文宗顯陵にも仁祖莊烈王后の徽陵にも「健元陵の眺望を阻害しないように」という選地上の配慮があった可能性がある。逆に、健元陵の真正面に出っ張る尾根の先端に築かれた英祖の元陵は、始祖陵の目前に居座る位置を占めてしまった。

健元陵を初め、東九陵の諸陵はいずれも谷奥から突き出る尾根に築かれている。風水の説法によれば、尾根筋を通して入首する龍脈が墓穴に気を運ぶと言う。東九陵の諸陵は谷を取り巻く尾根の龍脈からそれぞれの気を得ていることになる。それらの気を貯める来龍がクヌン山、つまり往時の儉巖山である。その儉巖山に大きな気をもたらす山が北方の仏巖山であることは、仏巖山からの尾根筋を跨ぐ道路に薄石を敷いて龍脈を保護したという『文宗実録』の記載によってわかる<sup>11)</sup>。

健元陵の東にある穆陵は豊臣秀吉の朝鮮出兵で一時は都を追われた第14代宣祖李昖の陵である。穆陵は前述したように健元陵東側の谷地をもって兆域としているが、当初は健元陵の西にあった。宣祖41年（1608）2月1日に没した宣祖の亡骸は同年6月11日に穆陵に葬られた。その位置は宣祖の遺命に従うもので、健元陵の西第二岡、酉に坐して卯に向く原であった<sup>12)</sup>。つまり、尾根筋が西から東へ下る地形、の

11) 『文宗実録』文宗元年（1451）10月22日の条に「風水学提調李正寧、鄭麟趾等啓、献陵来脈穿川峴旧路、考之風水書、固無所害、依旧通路、仍布薄石於其上、山脈左右旁田、亦且不多、禁人耕作、使草木茂盛。且健元陵来脈道路、許人通行、仏巖山下、古道成塹処、亦填土布薄石。従之。仍命明春始其役」とある。健元陵や献陵の脈が来る山脈を跨ぐ道路に薄石を敷いて脈への影響を防いだという記事である。

12) 『光海君日記』3巻「即位年（1608）2月14日」には宣祖の葬所を定める際に、健元陵の第二岡が近すぎはしないかという懸念が示された次のような記載が見え、文中、光海君の言葉より第二岡が宣祖指定の場所であったことがわかる。  
以大妃殿諺旨踏啓字下賓聽曰「第五岡不下於第二岡、少無欠缺、須得一岡双墳之處定之。」伝曰「第二岡乃大行

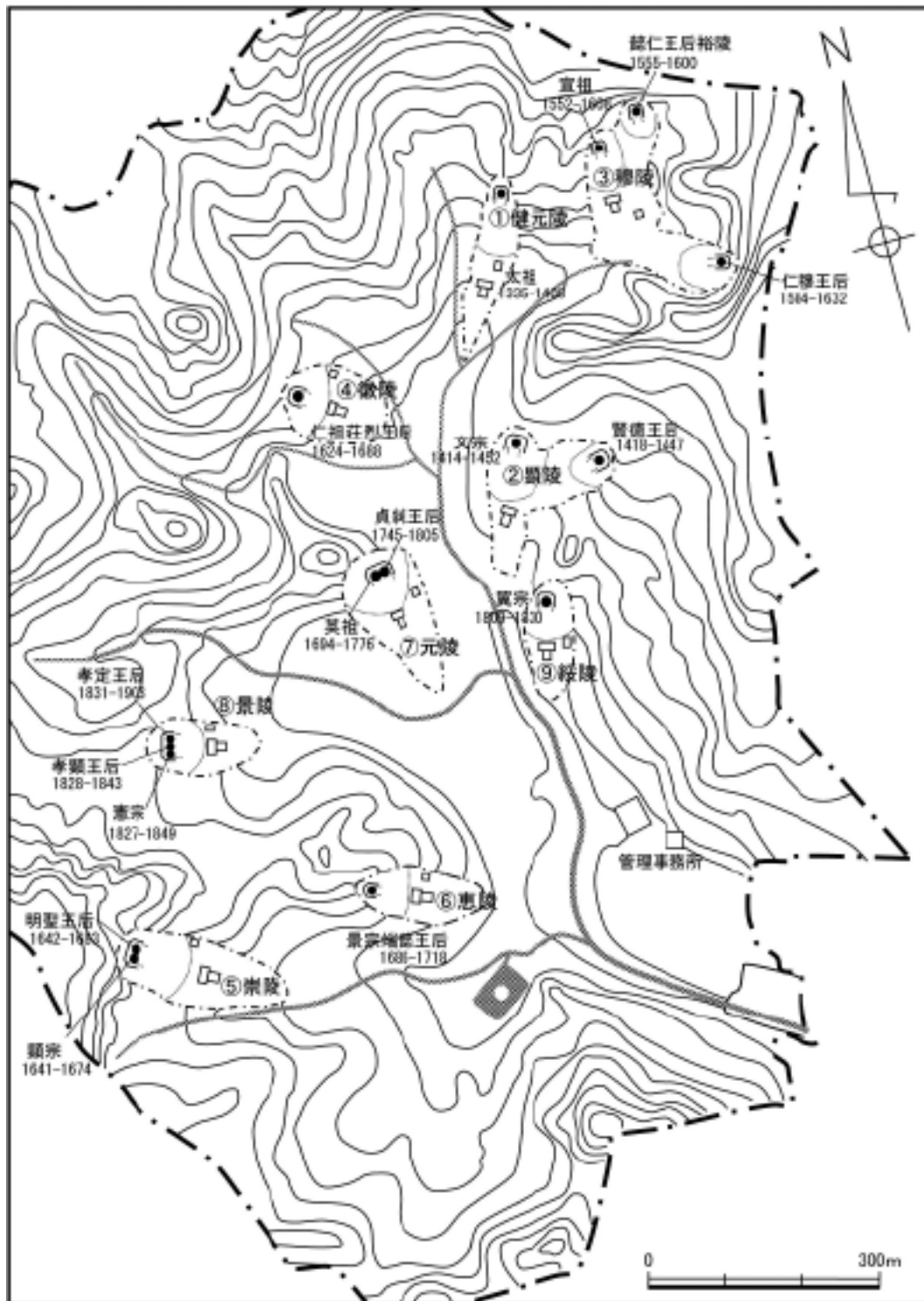


図4 東九陵の地形と配置

大王扱定者、聖意有在。第五岡、先王所不知之地、而慈教如此、事係重大、予亦不知所為。其詳議以啓。」李恒福議「懿仁之喪、術官亦以第五岡為吉、大行王欲卜深邃之地、故用第二岡。今聞有家長之忌、此則當問於相士。」奇自獻議「嘗聞『青烏經』乃地理之祖、而有葬近祖墳、殃及兒孫之言、必攻破此論、然後乃可用健元陵所得之處也。」尹承勳・李山海・李元翼・沈喜壽・許頊・韓応寅等皆以為不解地理、或云「未見形勢、難以臆斷、只在

ちに英祖の元陵が築かれた尾根である。その尾根に落ち着くはずであった宣祖の陵に対し難癖がつけられた。仁祖8年（1630）2月4日に原州牧使の沈命世が術士の言葉を信じ「穆陵の玄宮に水が貯まっていることは確実なので、陵を遷すべきではないか」と上疏したのである<sup>13)</sup>。

確かに曲垣の台石が数ヶ所傾き、雨の日に近辺の3ヶ所や武石の下から水が湧くなど、管理者からそれと思える報告もあった。風水を解する者が招集されて議論し、実地調査を経た結果、沈命世の上疏に従い陵が遷されることになった。改葬の場所は先に懿仁王后を葬った裕陵の右、つまり現在地である。宣祖の梓宮は同年（1630）11月15日に新陵へ遷されたが、旧陵の玄宮を開いても、沈命世が懸念したような浸水は見られなかった。穆陵と裕陵のある谷は芝生の広い兆域が印象的で、仁穆王后陵を含めた3陵がそれぞれの原上に封墳を構えている。そのなかで、穆陵の位置に心持ち隅に追いやられているような印象を覚えるのは、こうした妄信による改葬の結果であった。

むしろ健元陵左側の谷で優位を占めるのは懿仁王后朴氏の裕陵である。懿仁王后は宣祖に先立つこと8年前の宣祖33年（1600）6月27日に没し、同年12月22日、裕陵に葬られた。当初は抱川市新坪里（景福宮北北東46.2km）の付近に葬る予定で、造陵の工事もなかばまで進んでいたが、術官の朴子羽が不吉であると上疏し、改卜の末、健元陵に兆域が定められるに至った。封墳は袋状の谷の北側斜面に出っ張る小尾根に築かれ、谷中最も安定した景観を具えている。

王后陵から見て左斜め前にあるもうひとつの封墳が宣祖の継妃、仁穆王后金氏の陵である。仁穆王后は宣祖35年（1602）閏2月24日に王妃となり、宣祖に後れること32年後の仁祖10年（1632）6月28日に享年49歳で没し、同年10月6日に葬られた。その位置は「穆陵東岡の甲（東北東）に坐して庚（西南西）に向かう原」であり、宣祖陵に近いので、名称は穆陵として一括された。懿仁王后陵に裕陵という個別の陵号がつけられたことと対照的である。

3陵を参拝したのち、再び健元陵の前を通過して東九陵の中央部にある英祖の元陵に向かった。出発の時間が迫っていたため、九陵の視察はこの陵が最後になった。前述したように、元陵は健元陵の陵前に西方から突き出る尾根の先端部分にある。封墳は2基が眼鏡のように接続し、奥から前に向かって右墳に第21代英祖李吟、左墳に貞純王后趙氏が葬られている。英祖は在位52年にして、1776年3月5日に没し、同年7月27日、元陵に葬られた。陵所は英祖の遺志により、元来は西五陵の弘陵に定められていた（図10）。それが英祖の没後に争議を醸し、東九陵の現在地に変更されたのである。

弘陵は英祖に先立った貞聖王后徐氏の陵である。貞聖王后は英祖33年（1757）2月15日に享年66歳で没し、英祖の父肅宗の明陵を含む西五陵内に葬られた。陵の曲垣は王后陵の右を空けて幅広く立てられ、王の亡骸を待つ構えに造られた。それから19年後に英祖が83歳で大往生したあと、英祖の遺志に従うか、風水の説に依って新陵の地を求めるかで衆議が分かれた。それが単なる風水論議ではなく、政争のから

上裁。」答曰「予亦何知。卿等与術官議定。」

13) 『仁祖実録』仁祖8年（1630）2月4日の条に記された沈命世の提言は以下のようであった。

姑以地家之説論之、則葬法以蔵風、聚氣為先、而穆陵穴道騰露、地勢斗峻、内無閔欄、平臨大野、直見水去、此皆葬法之大忌也。臣曾忝工曹参判、随故相臣申欽、礼曹判書臣李廷龜奉審時、東辺莎台石一隅破缺、塗縫油灰有剝落处。問諸守僕、皆曰「戊、子、丑等方莎草、下雨潦之時、則水湧如泉。」又聞曾經齋郎者之言、「或連日下雨、則武石之下、水洩而流」云。此必地中有水、而阻於石土之築、仍成湧沸、可的知也。

む論議であることは明白であるが、結局は英祖没後約1ヶ月を経た4月1日に陵所が健元陵西第二岡に定められた。

健元陵西第二岡と言えば、かつて宣祖の穆陵が築かれた尾根であり、顕宗14年（1673）10月7日に驪州郡陵西里へ遷葬された孝宗の寧陵もしばらくその尾根に陵園を構えていた。いわば3度も王陵の地となった場所である。元陵は欄干石が接続した双墳であるが、元来は英祖の封墳だけを築く単独の王陵であった。英祖陵の左に葬られた貞純王后趙氏は15歳にして66歳の英祖の継妃となり、正祖時代を経て、純祖が即位すると、政権を握り権力をほしいままにした。純祖5年（1805）1月12日に享年61歳で没した趙氏の亡骸は景陵という陵号をつけて東九陵内の別所に葬る予定であったが、没後8日にして異議が出され、7日間の争議を経て英祖と同原に葬ることが決定したのである。

経緯からして、同原合葬は王后の遺志に依るものでないことは確かだが、結果的に西五陵の弘陵は貞聖王后墳右側の敷地が寂しく残され、東九陵の元陵では貞純王后墳が王墳の傍らに寄り添い、前方のすばらしい景観を永年共有することになった。朝鮮王陵に参拝する現地の人々はそういう陵の特徴を見ては李氏王朝の栄華や政争の歴史に思いを馳せるという。一方、天皇陵を参拝して皇室の歴史に思いをめぐらせる日本人がどれほどの割合を占めるのか。墳墓に対する参拝者の温度差を考えると、朝鮮王陵が世界文化遺産に登録された理由もおのずと見えてこよう。墓に対して礼を尽くさず、墳墓にまつわる歴史や精神を抜きにして学術的な価値だけを論じるのは空しい。

そのようなことを思いながら、元陵の景観を見ると、前方の風景は東九陵の初建陵である健元陵より開放的であり、壮観である（図5）。屈折した長い谷の最奥部にある健元陵に対し、元陵は谷が屈折する手前の、しかも谷筋の突き当たりに位置する。それだけに、封墳から見た地形が開け、陵区外界の景色がより広く見える。現在は九里市の高層住宅が密集して視界を遮っているが、地形からすれば、往時は玉宿川の流れが谷口の先に見えたに違いない。風水で言う「水法」である。玉宿川の対岸には加雲洞の丘陵が高層マンション群の背後に黒々とした山体を横たえて「案山」の役目を果たし（図3）、その背後に薄い山並みを見せるのは、左が礼峯山、右が黔丹山である（図1）。亥（北北西）に坐して巳（南南東）を向く元陵の軸線が西から東へ流れる尾根筋からずれるのは（図4）、元陵の軸線延長に山頂をもつ黔丹山を「朝山」とした結果であろう。当然のことながら、健元陵の選地にあたり、遠景の山並みが風水の理想的な要素として数えられたことだろうが、陵前の視覚できる風景に山丘が収まるのは、健元陵ではなく元陵である。健元陵は地形の安定感において東九陵中の第一位であり、元陵は景観の開放感において健元陵に勝る。同一の陵区にありながら、選地の観点が異なる例としてあげられよう。

『朝鮮王朝実録』の各所に記載された風水論議を見ると、重視されたのは、高山から伸びてくる龍脈の太さであり、玄宮を掘る丘の地質であり湿気である。下葬の日取りも風水術に明るい術官たちの指示が尊重された。陵寝の主軸方向は8干12支4維の24方位をもって定められた。景観に関しては、もたれる山と眺望する山の雄大さが議論の俎上にあがっている。肅宗の明陵図（図9）に表現されたような左右の山丘や美しい谷も大切な選定条件である。わずか5ヶ所の陵を視察しただけであるが、少なくとも東九陵にそのような風水景観の条件が備わっていることを確認できたのは視察の成果である。



図5 太祖健元陵の封土と前方の景観



図6 英祖元陵の封土と前方の景観

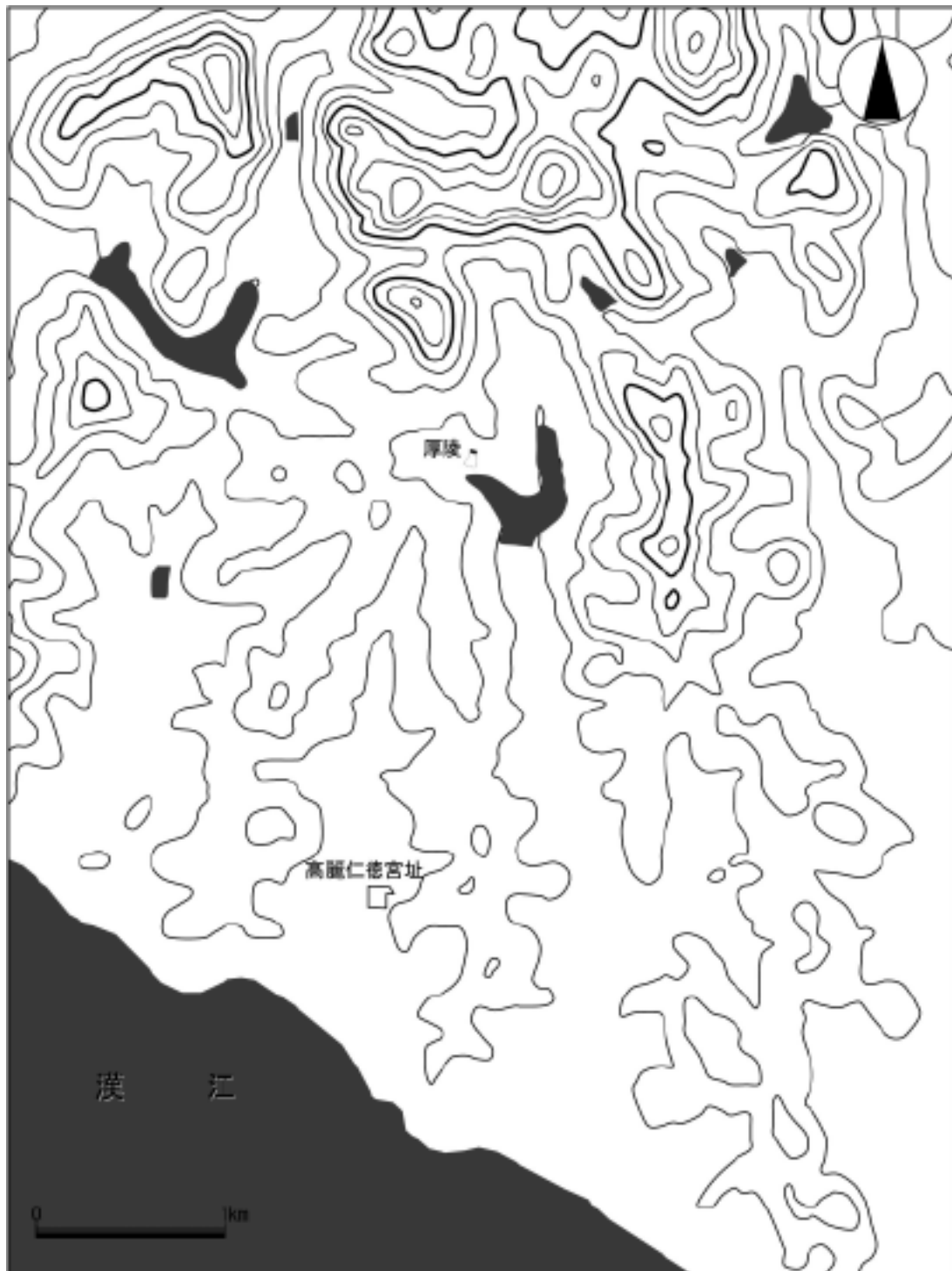


図7 厚陵の地形〔参考図〕

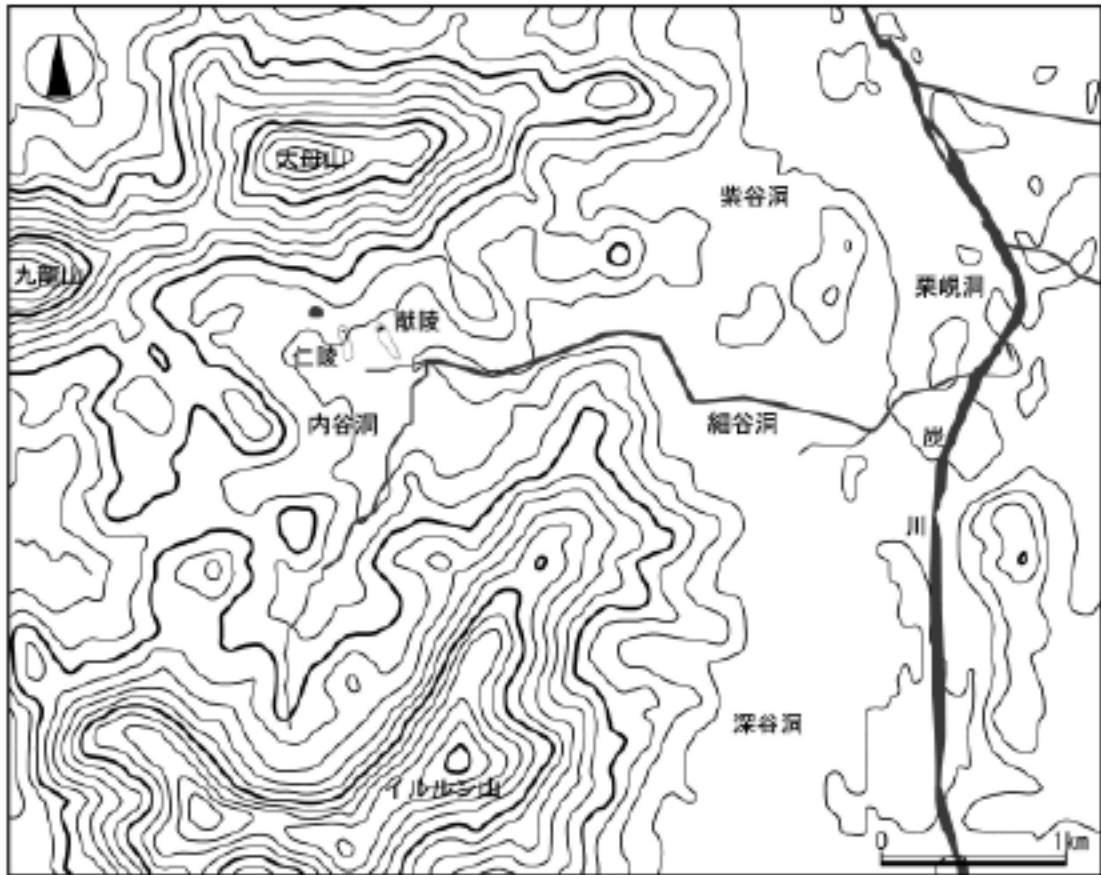


図8 献陵・仁陵の地形と配置〔参考図〕

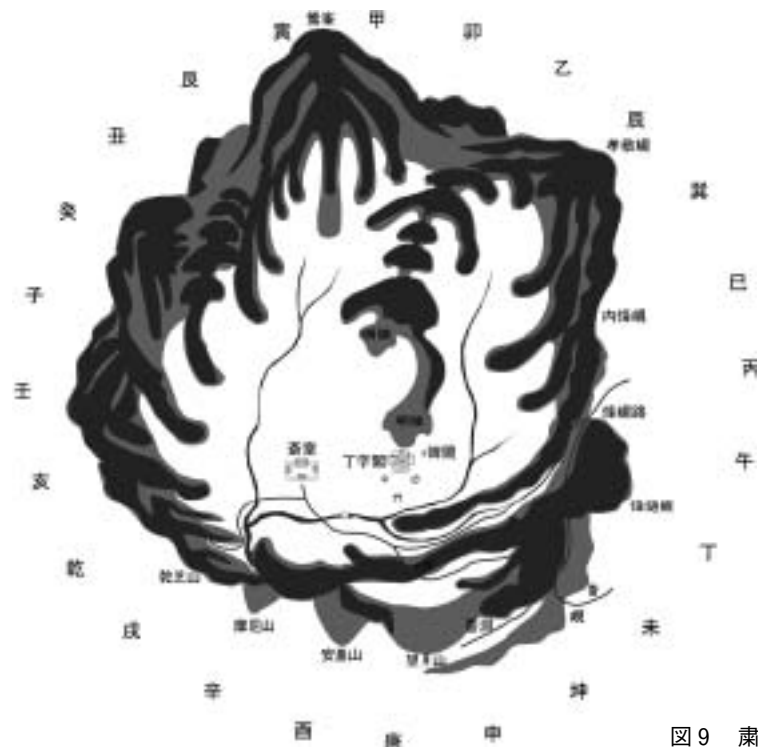


図9 肅宗明陵図〔参考図〕

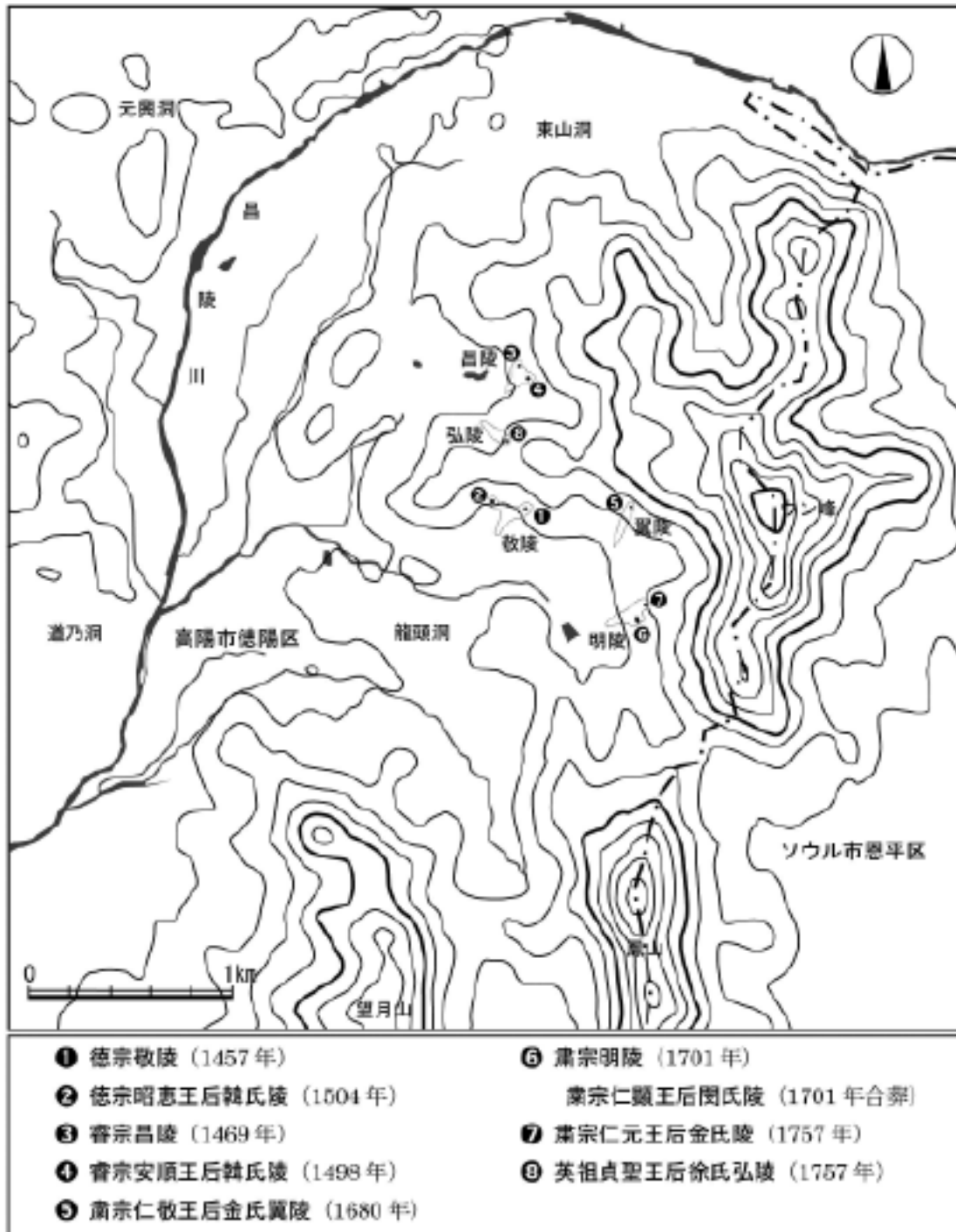


図10 西五陵の地形と配置〔参考図〕



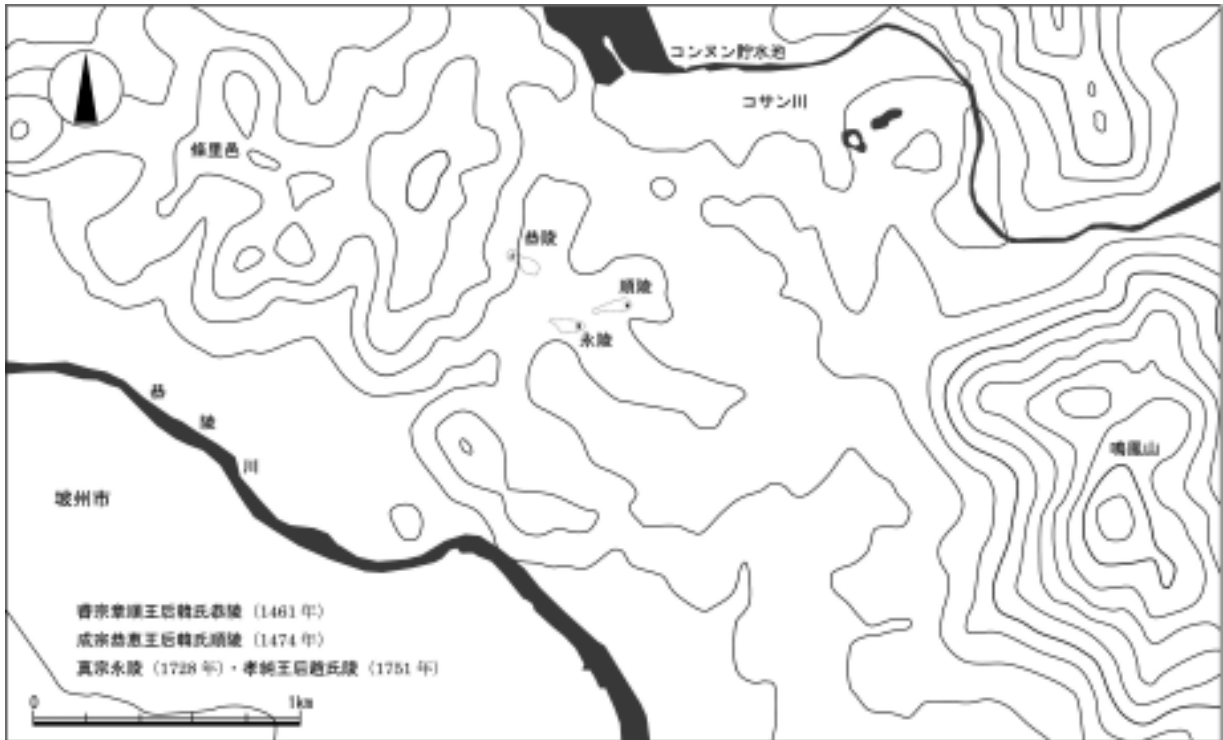


図11 坡州三陵の地形と配置〔参考図〕

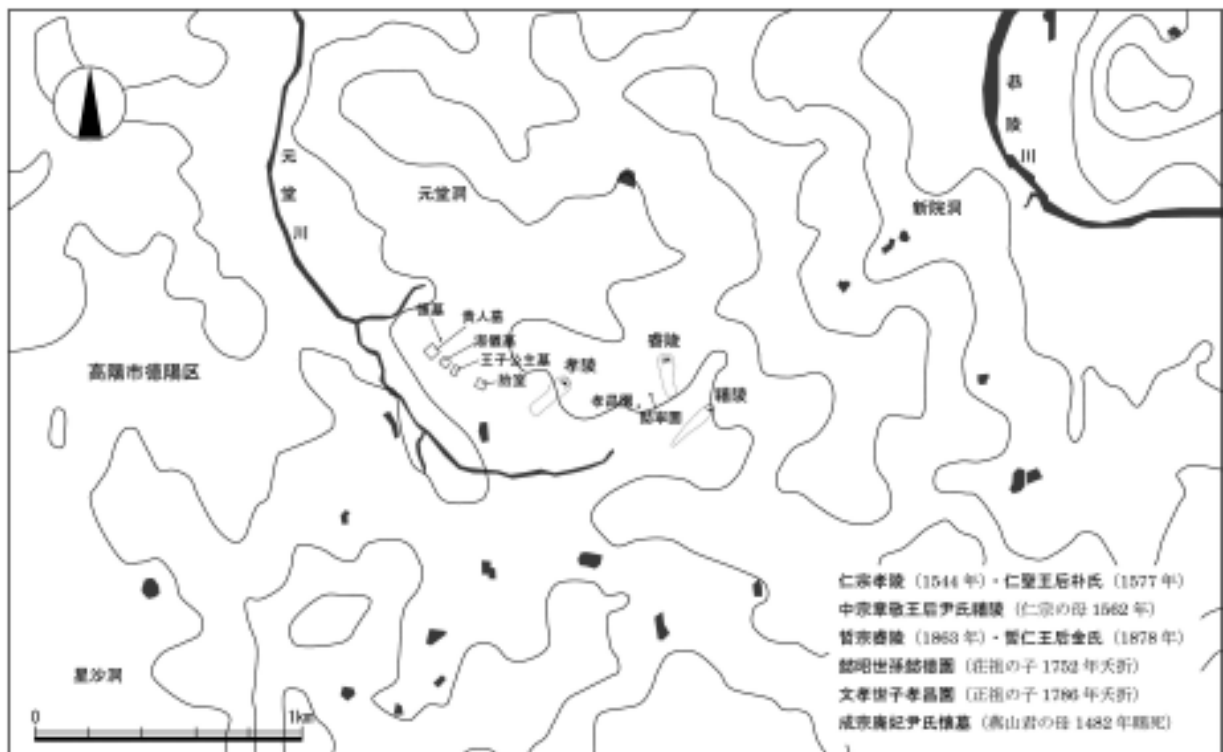


図12 西三陵の地形と配置〔参考図〕

## 朝鮮王陵一覧

代	廟号	王・妃名	陵号	所在地	距離	造陵時期
1	太祖	李成桂	健元陵	京畿道九里市仁倉洞（東九陵）	14.57	1408年
	神懿王后	韓氏	齊陵	北朝鮮開城市開豊郡光徳面	51.10	1391年
	神徳王后	康氏	貞陵	ソウル特別市城北區貞陵洞	3.64	1409年（遷葬）
2	定宗	李芳果	厚陵	北朝鮮開城市開豊郡興教面	48.19	1419年
	定安王后	金氏	(厚陵)	定宗と同原異封合葬		1412年
3	太宗	李芳遠	猷陵	ソウル特別市瑞草区内谷洞	15.57	1420年
	元敬王后	閔氏	(猷陵)	太宗と同原異封合葬		1420年
4	世宗	李禎	英陵	京畿道驪州郡陵西面	62.94	1469年（遷葬）
	昭憲王后	沈氏	(英陵)	世宗と同封合葬		1469年（遷葬）
5	文宗	李珣	顯陵	京畿道九里市仁倉洞（東九陵）	14.51	1452年
	顯徳王后	権氏	(顯陵)	文宗の左に別所附葬		1513年（遷葬）
6	端宗	李弘暉	莊陵	江原道寧越郡寧越邑	137.22	1457年
	定順王后	宋氏	思陵	京畿道南楊州市真乾邑	20.87	1521年
7	世祖	李瑀	光陵	京畿道南楊州市榛接邑	26.17	1468年
	貞憲王后	尹氏	(光陵)	世祖の左に別所附葬		1483年
	徳宗	李暉	敬陵	京畿道高陽市徳陽区龍頭洞（西五陵）	9.20	1457年
	昭恵王后	韓氏	(敬陵)	徳宗陵の右に別所附葬		1504年
8	睿宗	李暉	昌陵	京畿道高陽市徳陽区龍頭洞（西五陵）	9.67	1469年
	章順王后	韓氏	恭陵	京畿道坡州市條里邑（坡州三陵）	22.61	1461年
	安順王后	韓氏	(昌陵)	睿宗陵の左に別所附葬		1498年
9	成宗	李娐	宣陵	ソウル特別市江南区三成洞	9.82	1494年
	恭恵王后	韓氏	順陵	京畿道坡州市條里邑（坡州三陵）	22.10	1474年
	貞顯王后	尹氏	(宣陵)	成宗の左に別所附葬		1530年
10	燕山君	李隆	—	ソウル特別市道峰区放鶴洞	10.03	1513年
	居昌郡夫人	慎氏	—	燕山君と同原異封合葬		1537年
11	中宗	李懌	靖陵	ソウル特別市江南区三成洞	10.16	1544年
	端敬王后	慎氏	温陵	京畿道楊州市長興面	15.85	1557年
	章敬王后	尹氏	禧陵	京畿道高陽市徳陽区元堂洞（西三陵）	13.31	1562年
	文定王后	尹氏	泰陵	ソウル特別市蘆原区孔陵洞	12.26	1565年
12	仁宗	李焄	孝陵	京畿道高陽市徳陽区元堂洞（西三陵）	13.79	1544年
	仁聖王后	朴氏	(孝陵)	仁宗と同原異封合葬		1577年
13	明宗	李峴	康陵	ソウル特別市蘆原区孔陵洞	13.20	1567年
	仁順王后	沈氏	(康陵)	明宗と同原異封合葬		1575年
14	宣祖	李暉	穆陵	京畿道九里市仁倉洞（東九陵）	14.73	1630年（遷葬）
	懿仁王后	朴氏	裕陵	宣祖の左に別所附葬		1600年
	仁穆王后	金氏	(穆陵)	宣祖の左前に別所附葬		1632年
15	光海君	李瑱	—	京畿道南楊州市真乾邑	21.94	1643年
	廢妃	柳氏	—	光海君と同原異封合葬		1643年
	元宗	李瑈	章陵	京畿道金浦氏豊舞洞	23.77	1627年（遷葬）
	仁獻王后	具氏	(章陵)	元宗と同原異封合葬		1627年（遷葬）
16	仁祖	李焄	長陵	京畿道坡州市炭峯面	32.08	1731年（遷葬）
	仁烈王后	韓氏	(長陵)	仁祖と同封合葬		1731年（遷葬）
	莊烈王后	趙氏	徽陵	京畿道九里市仁倉洞（東九陵）	14.24	1688年

朝鮮東九陵の視察報告と兆域の選定に関する所見（来村）

代	廟号	王・妃名	陵号	所在地	距離	造陵時期
17	孝宗	李湔	寧陵	京畿道驪州郡陵西面	63.06	1673年（遷葬）
	仁宣王后	張氏	（寧陵）	孝宗の前に別所耐葬		1674年
18	顯宗	李柵	崇陵	京畿道九里市仁倉洞（東九陵）	13.88	1674年
	明聖王后	金氏	（崇陵）	顯宗に同原異封合葬		1683年
19	肅宗	李焞	明陵	京畿道高陽市徳陽区龍頭洞（西五陵）	8.46	1701年
	仁敬王后	金氏	翼陵	京畿道高陽市徳陽区龍頭洞（西五陵）	8.82	1680年
	仁顯王后	閔氏	（明陵）	肅宗に同原異封合葬		1701年
	仁元王后	金氏	（明陵）	肅宗の右に別所耐葬		1757年
20	景宗	李昀	懿陵	ソウル特別市城北區石串洞	7.55	1724年
	端懿王后	沈氏	惠陵	京畿道九里市仁倉洞（東九陵）	14.19	1718年
	宣懿王后	魚氏	（懿陵）	景宗の前に別所耐葬		1730年
21	英祖	李吟	元陵	京畿道九里市仁倉洞（東九陵）	14.28	1776年
	貞聖王后	徐氏	弘陵	京畿道高陽市徳陽区龍頭洞（西五陵）	9.48	1757年
	貞純王后	金氏	（元陵）	英祖に同原異封合葬		1805年
	真宗	李緯	永陵	京畿道坡州市條里邑（坡州三陵）	22.15	1728年
	孝純王后	趙氏	（永陵）	真宗に同原異封合葬		1751年
	莊祖	李愼	隆陵	京畿道華城市安寧洞	40.70	1789年（遷葬）
	猷敬王后	洪氏	（隆陵）	莊祖に同封合葬		1789年
22	正祖	李祘	健陵	京畿道華城市安寧洞	40.44	1821年（遷葬）
	孝懿王后	金氏	（健陵）	正祖に同封合葬		1821年
23	純祖	李玢	仁陵	ソウル特別市瑞草区内谷洞	15.47	1856年（遷葬）
	純元王后	金氏	（仁陵）	純祖に同封合葬		1857年
	翼宗（文祖）	李昊	綏陵	京畿道九里市仁倉洞（東九陵）	14.51	1855年（遷葬）
	神貞王后	趙氏	（綏陵）	翼宗に同封合葬		1890年
24	憲宗	李奂	景陵	京畿道九里市仁倉洞（東九陵）	13.96	1849年
	孝顯王后	金氏	（景陵）	憲宗に同原異封合葬		1843年
	孝定王后	洪氏	（景陵）	憲宗に同原異封合葬		1903年
25	哲宗	李昇	睿陵	京畿道高陽市徳陽区元堂洞（西三陵）	13.57	1863年
	哲仁王后	金氏	（睿陵）	哲宗に同原異封合葬		1878年
26 (1)	高宗	李熙	洪陵	京畿道南楊州市金谷洞	21.56	1919年
	明成皇后	閔氏	（洪陵）	高宗に同封合葬		1919年
27 (2)	純宗	李坧	裕陵	京畿道南楊州市金谷洞	21.25	1926年
	純明孝皇后	閔氏	（裕陵）	純宗に同封合葬		1904年
	純貞孝皇后	尹氏	（裕陵）	純宗に同封合葬		1966年

- 1) 第26代高宗は大韓帝国初代皇帝、第27代純宗は第2代皇帝である。
- 2) 陵号をゴシックで示したものは、世界文化遺産に登録された王陵もしくは王后陵である。
- 3) 王后を王陵に合わせ葬る際には、封墳を共有する「同封合葬」、一圈の曲垣内に複数の封墳を築く「同原異封合葬」、同じ陵域内の別の場所に陵を構える「別所耐葬」などの選択肢がある。
- 4) 距離は景福宮勤政殿中央から各陵の主墳までの直線距離（単位はkm）であり、Google Earthのツールで計測した。
- 5) 造陵時期は現在地に陵が造営された時期であり、遷葬されたものは没年と大きく異なる場合がある。

